慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国東印度会社の発展時代
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.5 (1928. 5) ,p.643(57)- 666(80)
JaLC DOI	10.14991/001.19280501-0057
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280501-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英國東印度會社の發展時代

野村兼太郎

本篇は本誌第二十一卷第十號に掲載せる拙稿「第十七世紀前半に於ける英國東印度會社の狀態」の續篇をなすものであつて、一六五八年より一七〇七年頃までの英國東印度會社の貿易狀態を記述したものである。從つて併讀されゝば幸甚である。前篇と同じく、Krishna, Morse 等の著作の補綴に過ぎないが、前回に擧げた著作の外に、P. J. Thomas, "Mercantilism and the East India Trade." 1926 を新たに參照した。すべてそれ等の先學の記述をそのまゝ使用したところが多いから、前回と同じく引用箇所を一々擧げる煩を避けた。加ふるに本篇は少しく多忙の間に筆を採つたから、意に滿たぬところも少なくない。それ等不備の點は幾重にも讀者の寛恕を乞ふ次第である。

一

英國東印度會社がその競爭會社たる和蘭東印度會社を始め、その他の會社との競爭に打勝ち、東洋貿易に優越なる地位を占むるに至つたのは、前掲拙稿にも述ぶるが如く、第十七世紀後半のことである。今こゝに英國東印度會社の發展時代と題して論ぜんとするのも又この時期に就いてゞある。委しく云へば、一六五八年から一七〇七年に至る。この時代こそ東印度會社が最も隆盛となり、他の英國商人の羨望するところとなつた時代である。しかし決して何等の障害もなかつたわけではない。一方東印度會社の成功を羨望する英國商人の妨害があると共に、他方印度に於いても厄介なる

制限、重稅、不當なる課稅等に依つて、妨げられてゐた。東印度會社はこれ等內外の障害に對して長い爭鬪の後よくこれを打破し、終に英國東洋貿易の基礎を確立するに至つたのである。

一六五七年東印度會社は排他獨占の特許狀を獲得するや、急速にその貿易狀態を回復し、以前に見ない大活動を始めたのである。先づその輸出の方面を觀察すると、一六五八年一月から一六六四年四月に至る六年と四ヶ月の間に八十四の船舶を東洋に派遣し、その輸出總額は九九二、七七〇磅（內金地金七三三、七四八磅）に達した。しかしその後和蘭との戰爭のために東洋貿易は甚しく阻害された。從つてその後三ヶ年間は會社の貿易も不振の狀態にあつた。僅かに小額の貨幣及貨物を積載し、九艘の船舶を送つたに止まる。この三ヶ年はその前六ヶ年とそれぞれ一年の平均額を比較すれば貨幣に於いて八分の一に足らず、商品に於いて二分の一弱である。そこでこれ等振不振の時代を通じて、九ヶ年間の總輸出額は十二萬一千磅（內貨幣八萬六千磅）であつた。

上記の和蘭との戰爭時代を終ると共に、東洋貿易は非常に熱心に行はるゝやうになつた。その反映は直ちに貿易額に現れてゐる。即ち次ぎの七年間には九十九艘の船舶が東洋に派遣され、貨幣に於いて一、一六五、三一一磅、及び英國產商品は約六十萬磅を輸出した。これを前九ヶ年の一年平均と比較すると貨幣に於いて十九割三分、商品に於いて略〻二十割に增加してゐる。かくの如くこの時期に於いて一年平均二十五萬三千磅の輸出を見たのは、全く前例のないところである。實に一六五七年以前に於いては輸出總額一年十萬磅を越えること極めて稀であり、二萬五千磅に過ぎない年さへもあつたのである。

一六六七年から七四年に至る七年間と、第十七世紀初期の一七年から二四年に至る七年間とを比較して見れば、如何にその發達が著しかつたかを了解することが出來ると思ふ。即ち約二倍半に達してゐる。殊に商品に於いては前期の一年三萬磅に對し、八萬五千五百磅を輸出してゐる。このことは明かに英國產毛織物が東洋の市場を獲得することに成功したゝめであつたと云つてよい。しかし會社は內外多くの困難に遭遇しなかつたわけではない。Sir Josiah Child 曰く、「英國の東印度貿易は英王國にとつて最も有利なる貿易である。少くともその一つである。」その產物を低廉に輸入し、英國將來の製造業の材料を給し、外國市場に多量の商品を供給せしめ、かくして就職を容易になし、船舶業の繁榮を維持する。加ふるに船舶は軍事上にも役立ち、又英王國の關稅收入は貿易に依つて增加し、資本も又增加する。

事實チャイルドの云ふやうに、印度貿易のかくの如き利益は否定し得ない事實である。その利益は內輪に見積つても、一年五十萬磅の資本の增加を見たと考へられる。從つて多くの商人は東印度會社の株を獲得せんと欲し、又會社はその特許狀の獨占權を維持せんと努力したのであつた。後に述ぶるが如く、一六八〇年代に會社の獨占に對し批難の生じたのはむしろ當然なことゝ云ふべきであらう。

一六七四―五年から一六八一―二年の八年間に印度に輸出した額は三百八十二萬二千磅、即ち一年平均四十七萬七千磅餘であつた。即ち一六七四―五年の前七年間と比較すると約二十二萬六千磅の增加、增加率八割九分であつた。以上一六五八年から一六八一年に至る東印度會社の輸出貿易を

概括して置くと次ぎの如くになる。（單位千磅）

時期	商品	貨幣	合計
一六五八——六六	三一二	七七六	一〇八九
一六六七——七三	六〇四	一一六五	一七七〇
一六七四——八一	七二八	三〇九三	三八二一
合計	一六四四	五〇三四	六六八〇

二

一六五八年以降、一七〇七年に至る五十年間に諸特許會社を通じて行はれたる東洋貿易の輸出總額を見ると、次ぎの如くである。

年代	十年間合計
一六五八——六七	一、二九五千磅
一六六八——七七	三、〇九八
一六七八——八七	四、九〇四
一六八八——九七	二、四〇八
一六九八——一七〇七	五、八五六
以上	

この表に依つて見るも、英國の東洋貿易は漸次發達して來てゐることは明かであるが、その大部分は東印度會社の手に依つて行はれてゐたのである。一六七八年以降の十年間の異常なる增加並びにそれに次ぐ十年間の輸出貿易の減退は勿論特殊の事情に基くものである。即ちその急激なる發展の原因とも見るべきものは、當時會社が Banda, Bengal 及び Chittagong に對する大膽なる征服計畫をなしたゝめであらう。從つて多くの船舶、金銀、戰時必要品等が多く送られたのである。次いで來たる輸出不振の十年間には種々なる原因が計へられよう。即ち（一）前期に於ける軍事的冒險の失敗から生ずる當然の結果であつた。（二）歐洲に於ける長期の戰爭、並びに他方（三）英國內に於ける東印度貿易の獨占に對する國民及び議會の猛烈なる反對を擧げなければならない。加ふるに（四）財政上の破綻はその輸出額を前十年間の半ば以下になすの餘儀なきに至つたのである。之に反して最後の十年間は英印貿易の著しき發展を生じた。この十年間の最初の年、即ち一六九八年は東印度貿易の新會社が設立された年である。前述の如く東印度貿易の利益が多大なるを知るや、利を見るに敏なるロンドンの商人はウィリアム三世の特許狀を得、議會の協贊を經て、新たに印度貿易の會社を設立した。名づけて The English Company Trading to the East Indies と稱した。

この最後の十年間の輸出總額は Books of Custom House に依れば大體次ぎの如し。

年代	正貨	商品
一六九八	三九九、二三〇	四五一、一九六
一六九九	八三二、七九五	九九七、一一六
一七〇〇	八〇七、五八三	九三二、二七五
一七〇一	七二五、五九三	八四七、六五七
一七〇二	四一〇、七六二	四九八、三四七

一七〇三	四五一、二七七	五八六、二五四	
一七〇四	三〇三、〇一二	四九六、四三九	
一七〇五	不明		
一七〇六	二三一、五四〇	五八六、二五四	
一七〇七	三一三、二八三	四九六、四三九	

以上の統計に依れば、この時期に英國から東洋に輸出された商品の額は一年平均六十萬磅で、正金の輸出は五十萬磅である。九年間の總計は正金四、四七五、〇〇〇磅に對し、商品五、四三七、〇〇〇磅になる。かくの如きは從來見ざる現象で、商品の輸出の増加の著しかつたゝめである。然るに前記の新舊二會社の一年の輸出總額の平均を見ると、約五百八十萬磅である。然るに關稅簿に依れば前掲の如く約一千百萬磅となる。差引五百二十萬磅ばかりは二印度會社以外の手に依つて輸出されたと見るべきであらう。即ち二印度會社と略〻同額の輸出が私的商人に依つて行はれたのであらう。即ち各船舶の乘組員、水夫、自由商人、密貿易者、及び個立貿易者に依つて營まれたのである。チャイルドに依れば、一六七五年に私的貿易の會社貿易に對する比は二に對する七であると云つてゐる。しかしその後會社の貿易許可の寛大になつたことゝ貿易船舶の増加したことゝに依つて一層増加したと考へられる。即ち一六五八年から一六七七年までの私貿易と會社貿易との比は一と四の割合であるが、一六七八年から一六九七年までの兩種の貿易は少くとも一と二の割合であつたと思はれる。從つて諸會社を通じて行はれた貿易額はこの時代に於いては英印度貿易の一部に過ぎなくなつたことを注意すべきであらう。然らばこれ等の商品の輸出先は何處であつたらうか。勿論大部分は直接印度に輸出されたのであるが、その中心地は何處であつたか。次ぎにこの問題を明かにしよう。

三

英國の東洋貿易の中心地は Surat と Bantam とであつた。この兩地に派遣された船舶の數は略〻同數であつた。その外 Coromandel 沿岸及び Bengal 灣に至る船舶も少なくなかつた。今一六五八年から一六八一年に至る二十四ケ年間の船舶統計に依ると次ぎの如くである。

地名	總噸數	一年の船舶平均數	百分率	
バンタム	三二、〇〇〇	三、二分の一	三〇%	印度以外へ
スラト	三二、〇〇〇	三、二分の一		
コロマンデル沿岸及びベンガル灣	四三、〇〇〇	四、三分の二	七〇%	印度へ

又他の統計に基くと、すべての輸出の八十八パーセントは印度で、他のアジア諸港は十二パーセントに過ぎない。その中スラトは三十三パーセント、コロマンデル沿岸及びベンガル灣が五十五パーセントとのことである。さらにそれぞれの地方に輸出された商品と貨幣との割合を見ると次ぎの如くになる。

	スラト	コロマンデル沿岸ベンガル灣	バンタム
全輸出	三三%	五五%	一二%
貨幣	二四%	六四%	二二%

商品	六三%	二五%	一二%

右表に依つて見れば、スラトとコロマンデル沿岸及びベンガル灣地方とはその地位が全く反對であることを知り得る。

印度に實際に航行した船舶は上述の時期にはすべてゞ九十一艘で、積載噸數三萬九千八百七十噸であつた。Priaman, Tonqueen その他に向つたものは約三十二艘八千七百噸であつた。

以上の數字を以つてしても、大體英國東印度會社の主要なる取引先が印度であつたことを知り得るであらう。一六八一年までは英國の東洋輸出貿易の一割二分が印度以外の地に行はれたに過ぎず、又その後十六年間は殆どその半ばに減退したのである。然るに一六九八年以後の十年間にこの狀態は一變して來た。即ち一六九八年から一七〇七年までの間に百六十艘、五萬五千七百噸が送られたが、その中印度に直接向つたものは八十五艘に過ぎず、他の七十五艘は Priaman, Fort York 及び支那に航行してゐる。

當時支那に於けゝ主要なる貿易港は廣東であつた。以前から東印度會社は多くの難關があつたにも拘らず、支那との貿易を、殊に厦門に於いて開始せんと努力してゐた。しかし前述の如く一六九三年十月七日には新會社が創設され、それとの競爭の爲めに、支那に對しては東印度會社の許可に依る私的商人に委せてしまつた。從つてこれ等の期間に於ける支那貿易は幾分混亂の狀態にあつたと云つてよい。英國東印度會社の船舶が廣東に於いて收引を開始したのは一六九八年であつた。この時代から毎年四艘又は五艘の船舶が支那に航行するやうになつたのである。これ等の船舶は支那から歸航すると、一隻は Bengal, 一隻は Fort St. George, 一隻は Surat 等にそれぞれ寄航し、時には Mocha に行くものもあるが、他の一隻は英國に歸る。何れもそれ等の地に支那商品を荷揚げする。前の三艘又は四艘の商船は印度又はアラビアの商品を積荷して英國に歸る。從つて印度貿易全體としてはこれ等の船舶も算入しなければならないが、英國商品の輸出に關しては、印度行のものが全體として割合が減少したことになるのである。

何故にかくの如き變化が生ずるに至つたか。一つはキャラコやモスリンに對する重稅である。どの程度の重稅であつたかは今日明確に知ることは困難であるが、大略は後述するつもりである。並びに他方一六九八年以降印度絹輸入の禁壓である。かく印度品輸入の禁止、もしくは重稅は印度貿易の價値を減少せしめたと考へられるが、後に述ぶるやうに實際の影響は甚だ疑問である。なほ印度產織物に就いては、後に述ぶる機會があらうと思ふ。何れにしてもこれ等の事情は東印度會社をして、印度以外の貿易にも力を注がしめた主要なる原因であつたと見做し得ると思ふ。

四

次ぎに問題となるのは如何なる商品が英國から東印度會社の手に依つて印度に輸出されたかと云ふことである。この第十七世紀後半に於いて英國輸出品の主要なるものは、それ以前と同じく鉛、鐵、及び毛織物である。他方水銀、朱、珊瑚、象牙のやうな品物をヨォロッパ及びアフリカで先づ獲得し、印度に輸出した。一六五七年以前よりも常に多量に輸出したことは云ふまでもない。例へば一六五三年から一六五六年までの四年間の輸出貨物は七千四百二十五磅に過ぎない。その内譯は

次ぎの如し。

（一）織物（廣布）　一九五四磅
（二）鉛　一七二二磅
（三）朱　五九三磅
（四）水銀　二二一一磅
（五）雜　九四五磅

勿論この時期は會社の貿易が最も不振を極めた時代であるが、輸出商品の分布狀態を知る參考になる。この四年間中最も振はなかつた年は僅かに一千八百五十六磅を輸出したに止まる。その中四分一は織物であつた。然るに一六五七年後この狀態は急速に變り、著しく發展して來た。即ち同年以後五ヶ年間に二十五萬八千磅の商品が輸出された。次いでその後の五年間は前述の如く和蘭との戰爭のために不振の狀態にあつたが、漸次發展する傾向を示した。その詳細の表は次ぎの如くである。

品名	一六六四—五年	一六六五—六年	一六六六—七年	一六六七—八年	一六六八—九年	合計
（一）毛織物	一〇、〇〇八磅	一五、七三四磅	八四三磅	二三、〇四六磅	一八、六三六磅	六八、二六七磅
（二）鉛	三、二四三	八四八	二九八	七、二四六	六、二三四	一七、八六九
（三）錫	—	—	—	四、二八〇	五、八三四	一〇、一一四
（四）銅	二、五九八	—	—	六、六二五	一二、七八七	二一、〇一〇
（五）珊瑚	一、一二一	四七七	一、〇一二	—	一三、九五六	一六、五六六
（六）水銀	五、九〇四	二、一七七	七三一	一二、四七八	八、二三七	二九、五二七
（七）朱	三、一三二	三六七	—	二、〇九五	一、四六二	七、〇五六
（八）雜	一、七八一	一、〇一六	二八〇	八、三五三	二、五五三	一三、九八三
合計	二七、七八七	二〇、六一九	三、一六四	六四、一二三	六八、六九九	一八四、三九二

即ち輸出商品中第一位を占むるものは毛織物であつて全體の三割九分を占めてゐる。さらに他の統計を採れば、一六七六年から一六八五年までの狀態は次ぎの如くである。

一六七六年より八〇年まで

毛織物類	二一〇、四七二磅	五割二分弱
他の商品	一九四、六四六磅	四割八分强
合計	四〇五、一一八磅	

一六八一年より八五年まで

毛織物類	二五八、一七四磅	五割八分弱
他の商品	一八七、四四〇磅	四割二分强
合計	四四五、六一四磅	

かくの如く織物類の輸出率が著しく增加したのみならず、價格に於いても漸次增加を示してゐる。

一六六四—六八年	一年平均	一三、六〇〇磅
一六七六—八〇年	同	四二、〇九四磅
一六八一—八五年	同	五一、六三五磅

殊に目下問題としてゐる時期の終末に於いてかく商品の輸出額は著しい進歩を示してゐる。

一六九八―一七一〇年の輸出價格

（一）毛織物	一、〇七七、六六八磅	五割七分強
（二）鐵（英國品）	四六、二九三磅	四分
（三）鐵（外國品）	二七、三八七磅	
（四）鉛	七八、五八〇磅	四分強
（五）珊瑚（外國品）	二〇、七〇六磅	一分
（六）雜	六一六、〇五一磅	三割三分
合計	一、八六六、六八五磅	

以上の表は公報に基くものである。從つてその評價額は市場價格よりも低いのが常である。故に實際に東洋に送られた商品の價格はこれよりもずつと大なるものであつたらう。上述せる如く東印度會社の輸出貿易は多くの障害があつたにも拘らず、この時期に於いて著しい發展を示すに至つた。そしてその重要輸出品は毛織物であつたことに注意して置く必要がある。そこで次ぎに輸入の方面を觀察して見よう。

五

一六五八年から一七〇七年に至る五十年間に於ける印度及び支那商品の輸入に關する價格その他の記錄は甚だ少ない。從つて確實なることを知るのは甚だ困難である。しかし會社の報告や命令書に依つて多少明瞭にすることが出來る。この五十年間は輸入に於いても著しい發展を示してゐる。一六六二年から翌年にかけての一年間の輸入總額は三八四、六七一磅であつたが、六年後の一六六八年―九年の一年間は四三二、八六九磅に增加してゐる。

前述の如く新設會社の創立と共に、舊東印度會社の貿易額は當然減少した。單に新會社との極端な競爭のみならず、兩者の爭に乘じて起つて來た私掠船の貿易に依つて減退せざるを得なかつた。しかし新舊兩印度貿易會社の輸入總額は著しい增加を示してゐる。元來東洋から直接印度に輸入される商品の公定評價は大體に於いて原產地の價格に基礎を置くものである。

輸入品公定評價額

一六九八年	三五六、五〇九磅	一七〇四年	七五七、八一四磅
一六九九年	七一七、六九五磅	一七〇五年	缺
一七〇〇年	七八七、七三一磅	一七〇六年	六四四、六五二磅
一七〇一年	七六二、一八八磅	一七〇七年	三五五、八三八磅
一七〇二年	二四七、〇一四磅	合計	五、二二五、七五〇磅
一七〇三年	五九六、三〇九磅		

これ等の價格は大體に於いて送狀のものに近いものである。一六九八年から一七〇七年までの一年平均は約五十八萬磅であるのに、最も景氣のよかつた一六九九年から一七〇一年の三ヶ年の平均は約七十五萬六千磅に上つてゐる。假りにこれ等の商品販賣價格を二倍と見るも、（この假定は明かに低く過ぎるが、）この十年間は百萬磅の古い標準を遙かに突破し、ある年の如きは明かにその販賣總額三百萬磅を超過したと思はれる。

東印度會社の貿易がこの時代に著しく發展して來たゝめに、英國は自ら東印度の產物の中心市場

として、又供給者としてヨォロッパやアメリカに對するに至つたのである。一六七〇年から一六八八年にかけての歐洲戰亂中、東印度商品の再輸出は會社の販賣價格に基けば一年平均五十萬磅に當る。胡椒、印度藍、絹、キャラコ、藥劑等が西方諸國の絶えず要求す　主要なる商品であつた。英國はこれ等を供給することに依つて多大なる利益を得てゐたことは云ふまでもない。Sir William Petty がその著"Political Arithmetic"中に記載するところに依れば、印度商品の輸出は六十萬磅であつて、その利益は一年の貿易の總額の原價の二倍に等しいと云つてゐる。勿論これには多少の誇張があるやうであるが、東印度會社及びその他の商人が東洋に輸出した金銀の總額よりも確實により多くの利益を得てゐたと思はれる。即ち極めて概算ではあるが、これを推定すれば、一七〇二年に至る四年間の英國から再輸出された東印度の產物の六割三分まで印度及び支那產の絹及びキャラコでその額は約百六十萬磅であつた。そしてこの貿易に依つて英國の得た利益は毎年百萬磅を下らなかつたらう。以つて東印度貿易の齎らした國民の利益を推定することが出來る。

六

英國の要求した印度產品中最大なるものは織物である。吾人はこゝに少しく當時の流行の變化を一瞥して置きたいと思ふ。第十七世紀の後半から英國に於ける男女の好みに大なる變化を生じて來た。古い巾廣の重々しいものを嫌ひ、輕快な意氣な衣服を好むやうになつた。英國の織物業者はこの急激な變化に俄かに應ずることを得ず、勢ひ外國品を使用するやうになつた。即ちフランス品が適用された。さらに一歩進んで云へば當時のこの流行の變化は、當時文化の中心であつたフランス王朝の隆盛期に際し、その影響を受けたものと見るべきであらう。然るにかくしてフランス品の盛んに流入することは英國の製造業者や商人にとつては大なる打擊たらざるを得なかつた。終にそれ等のフランス品排斥の運動が功を奏し、一六七八年フランス產の絹及びリンネル、並びにワインとブランデイとの輸入を禁止するに至つた。英國人はかくしてフランス品を放棄した。しかし彼等は直ちに自國產の毛織物や絹織物の使用に歸つたわけではない。フランス品を棄てた彼等はそれに代るに印度品を以つてしたのである。この點を論じたパンフレットは實に少なくない。

"Our ladyes all were set a gadding,
After these toys they ran a madding;
And nothing then would please their fancies,
Nor dolls, nor joans, nor wanton nancies,
Unless it be of Indian making."
(Prince Butter's Tale, 1696?)

かくして印度織物に對する極端なる要求が起り始めたのである。印度品を如何に要求するやうになつたかに就いては Cary, Defoe その他の當時の著作者が多くのことを語つてゐる。男も女も印度產の布類殊にキャラコやモスリンで作つたものを使用してゐた。上流貴婦人の如きは恰も印度女王の大使の如き觀を呈した。當時女王も王廷の貴婦人もモスリンとキャラコとを好んで纏つてゐたからである。

しかし英國だけが印度產の織物を尊重したわけではない。歐洲大陸の各地に輸入され、歡迎されてゐたのである。フランスに於てはそれ等の使用が野火の如く擴がつた。そのためにフランス各地に於ける絹織物業やリンネル業は多大の損害を蒙らざるを得なかつた。一六八六年にかの Colbert が禁止令を發布し、一時その勢を阻止したが、それとても印度產モスリンやキャラコを全然使用しないやうにすることは出來なかつた。ドイツ、スペイン、イタリイ等に於いても印度品は普通に使用されてゐた。かくの如くして印度から歐洲大陸に輸入される印度產織物は甚だ多量に上つた。從つて英國東印度會社の織物輸入貿易はこの時期に於いて著しき增加を示したのは極めて當然であると云ふべきであらう。次ぎに先づそれ等の貿易の發展を實數に就いて觀察して見よう。

七

上述の如く東印度會社の主要なる輸入品は織物である。次ぎに一六五八年から六四年に至る七年間の印度に於ける各中心地の輸出織物の一年平均數を見れば、

Surat	八萬四千五百反
Fort St. George	九萬八千反
Hugly	一萬五千反

即ちこの七ヶ年の間に每年印度から英國に輸入された織物の數は平均十九萬七千五百反であつた。その後和蘭との戰爭中一時減退したが、戰後著しき增加を示してゐる。例へば一六六九年から七二年に至るスラトからの一年平均は前表よりも十六萬二千五百反を增加し、二十四萬七千反、即ち約三倍となつてゐる。

かく印度織物の英國に於ける需要が增加したので、東印度會社はさらに一層これを發展せしめんと欲し、一六七二年には英本國から撚絲職人、織工、染工等を印度に連れて來て、土人の織工に英國及びヨォロッパの市場に適するやうな製品の製作法を敎へた。このことは明かに印度產織物の賣行を良好ならしめた。從つてその輸出を激增したのは當然である。

	Fort.	Bay.	Surat.	合計
一六七三—七八年	一、四七九、千反	五四九、二分の一	一、八七五、	三、九〇三、二分の一
（一年の平均	二四六、二分の一	九一、二分の一	三一二、二分の一	六五〇、二分の一）
一六八〇—八三年	三、七九五、	一、八二一、	二、九四八、	八、五六四、
（一年の平均	九四八、四分の三	四五五、四分の一	七三七、	二、一四一）

即ち八〇年代に於いては一年二百萬反以上も印度より輸入されてゐたのであつた。その輸出地の最も重要なる地位を占むるものは、前表の示すが如く、スラトであつた。

次ぎに生絲に就いて見るに、生絲は英國に於ける絹織物業者にとつて必ずある程度の輸入を必要とするものである。この產業は當時相當重要視されてゐた。一六五五年のウェストミンスタア條約に於いても特にこれについて規定してゐるくらゐである。アジア諸國の內生絲の供給國としてこれまではペルシアが最大であつた。しかしペルシア絹は質に於いても決して優秀なものではなかつた。この第十七世紀後半に於ける顯著なる現象はペルシア絹輸入の減少と、東印度會社のベンガル

に於ける生絲事業の著しい發展とである。

ベンガル絹に對する最初十年間の投資は極めて些細なものであつた。例へば一六五八年 Hugly から輸出された絹は三千磅に過ぎず、翌年は一年百梱の注文を得たが、間もなく三十梱又は四十梱に減退した。しかも一封度に就いて六志七片から七志六片で得られた時に限られてゐた。然るに漸次に增加の傾向を示して、一六七三年には五百八十梱、一六七九年には二千二百梱の多きに達した。

この貿易は次いで一六八〇―一年から一六八四―五年に至る五ヶ年間は最も隆盛であつて、前後にその比を見ないくらゐであつた。即ち全部で二萬八千七百梱に達した。たゞこの計算は會社自身のではない。不幸にして會社側の計算は明瞭でない。しかしこれ等の年にベンガルに送られた貨幣額が著しく大であつた點を見れば、Cossimbazar, Ballasore, Hugly 等に於ける生絲に對する投資の異常に多かつたことを示すものと云へるであらう。又この貿易の利益が頗る大であつたことは、一六八一年會社は嚴重なる禁令を發して、獨占を維持せんとしたことに依つても推測することが出來るだらう。

しかしかくの如き莫大の輸入を何時までも維持することは不可能であつた。ベンガル帝國の敵意は先づこの貿易を減退せしめた。しかしなほ一六八六年から一六八八年に至る三ヶ年の間は四千八百五十梱の取引があつた。歐洲に於ける戰爭はベンガル絹の需要を增加したやうである。即ちフランス戰爭はトルコとの貿易を阻止したからである。從つて一六九三年と九四年とはベンガルの東印度會社商館は出來る限り多くの絹を得んとして努力した。然るに多くの努力に拘らず、その後は歐洲の戰亂と會社の財政的困難とに依つて、著しく減退し、一七〇〇年と一七〇一年とを除き、その輸入は極めて少なかつた。僅かに三百梱と四百梱の間を前後するに過ぎず、殊に一七〇六年から一七一〇年に至る五年間の如きは、ベンガル、支那、恐らくペルシアからの輸入を合せるも、なほ一年百梱に過ざぬ有樣であつた。

八

印度より輸入されたその他の商品に就いて詳述することも、多くの興味ある問題を提供すると思ふが、こゝには餘裕が與へられてないから、單にその主要なるものに就いて一瞥するに止めて置く。

印度の主要なる輸出品として擧げらるゝものに胡椒がある。英國はバンタム並びにその附近から輸入してゐたが、六十年代以降マラバール沿岸も重要なる取引先となつた。一六七二年から八一年の十年間に四、〇八五、三四八封度の胡椒が東印度會社の手を通じて英國に輸入されてゐた。即ちそれ以前の三十年代には十年間に百五十萬封度、六十年代には二百萬封度に過ぎなかつたのに比較すれば、著しい增加であると云はなければならない。勿論かくの如き巨額の胡椒が英國に於いて全部消費されたとは思はれない。即ち Josiah Child に依ればその二十分の一が國内に於いて消費されたに過ぎないことになるが、多くとも恐らく十分の一を出でず、他は歐洲大陸に再輸出されたものであらう。胡椒の英國輸入は益〻增加する傾向があつた。一六九八年から一七〇二年に至る新舊兩印度貿易會社の競爭激甚な五年間には實に二千七百三十萬封度以上もロンドンに齎されてゐる。かくの

如き巨額の輸入は以つてマラバール沿岸地方の胡椒無盡藏なることを證するものである。一六九九年の如きは一年で一九、六三五、六一〇封度を輸入してゐる。全く英國商業史上稀有のことである。しかしこの狀態も決して永續したものではない。その後一七一〇年までの一年の平均輸入額は百二十五萬封度であつた。これ等の三分の二が印度から來たので、他は Bencoolen から來た。

第十七世紀後半に於ける新商品は茶である。茶は普通一六六〇年以前には英印貿易中に、殆ど現れてゐない。然るにその後五十年間に急激に發展して來た。茶を英國に輸入したのは誰であるか、又何時であるかと云ふ問題に就いては何等直接の確證はない。しかしこれを利益の多い貿易の對象物としたことに就いては東印度會社の功甚だ大なるものがある。東印度會社が始めて茶に投資するやうになつたのは一六六五年に臺灣及ぴトンキンに商館を設置したに始まる。一六六七—八年にバンタムの代理店が僅か百封度の最良の茶（tea）を送らんと欲した。そして最初にバンタムから輸入されたのは一六六九年で百四十三封度に過ぎなかつた。その後三年間に三百四十六封度以上輸入されたが、次ぎの六年間は中絶してゐた。八十年代の最後の三ヶ年間に五千五十七封度の輸入を見た。然るにバンタムに於ける騷擾はこの重要ならざる事業を中止させてしまつた。しかしこの間に英國の貴族階級の間に茶を飲用する嗜好が次第に盛んになつて來た。從つて東印度會社の當事者もこれが輸入に努力し始めた。その結果一六八五年から一七〇〇年に至る十六年間に二六六、六〇一封度、即ち一年平均一六、六二二封度の輸入を見るに至つた。第十八世紀の初めにすでに茶の飲用は一般普通のことになつてしまつた。勿論茶の値段は決して安くはなかつた。一六七八—八六年頃會社の販賣値段は一封度十一志六片から十二志四片であつた。一七〇八年から一七一〇年には茶の輸入稅が高率になつたにも拘らず。一封度十一志十一片であつた。これは一つは輸入額が以前よりもずつと增加したゝめであらう。即ち一七〇一年から一七一〇年に至る十年間に輸入された茶は七八六、三二六封度で、これを前記の十六年間の輸入額に比較すれば、平均して五倍に達してゐる。

茶と同じく飲料として愛用されたのは珈琲である。しかし珈琲は決して茶のやうに、急激に一般に普及すると云ふわけにはゆかなかつた。しかし漸次に增加の傾向を有すること次ぎの如くである。

一六六九年	二〇〇梱
一六七〇—七一年	三〇〇梱（一年平均）
一六七二—七五年	二〇〇梱（同　〃）
一六七六—七七年	三〇〇梱（同　〃）
一六七八—七九年	四〇〇梱（同　〃）
一六八〇—八一年	六〇〇梱（同　〃）
一六八二年	一二〇〇梱

九

以上吾人は英國東印度會社が第十七世紀後半に於いて急激に發展し來た事情、並びにその輸出入の狀態が如何なるものであつたかを大體觀察し終つた。そこで最後に少しくこれ等の印度貿易に對する英國人の態度、並びにその影響に就いて略述してこの稿を終りたいと思ふ。

近世初期に於いて英國經濟生活の中心をなすものは毛織物業である。從つて東印度貿易の輸出品として毛織物が第一位にあるは當然なことである。從つて一般に毛織物業が重要視されてゐた。政府は常にこの階級の利益を保護しようとし、その政策も、對内、對外、何れに於いても、この產業の利益を考慮すること甚だ大であつた。如何なる貿易と雖も、これを阻害するやうなものは禁止しなければならないと考へてゐた。

毛織物に次いでは絹織物である。誰人も知るの如く、絹の原料は英國では出來ない。しかし前述の如く英國内に於ける絹物の需要は次第に大になつて來てゐた。幸にフランス新教徒がナントの勅令の廢止と共に英國に渡來した。彼等はこの種の輕い織物に優秀なる技倆を有してゐた。かくして英國に於いても優良なる絹織物が生產されるやうになつた。前述の如く印度の主要なる輸出品はその織物にあつた。東印度貿易が最初に遭遇した種々なる困難はむしろこれ等の國内の事情にあつたと云つてよい。東印度會社は將に發展期に際して、國内に於ける主要なる生產物と印度からの主要なる輸入品との調和に苦しんだのである。

英國に於ける織物業者は漸次に自家產業の保護のために、適當なる政策を採用せんことを希望するやうになつた。次第に各階級が結合して、印度織物貿易に對抗する保護政策を要求するやうになつた。前述の如く英國產毛織物は多額に輸出されてゐたにも拘らず、印度品に對する排斥は强くなつて來た。しかしこれが議會を通過し、實施さるゝまでには相當の年限を必要とした。一六七五年にこの問題は始めて議會に提出されたが、未だこれが適當な法律として效果を生ずるには至らなかつた。

印度の絹及びキャラコの輸入に對する不平は次第に高まつて來た。"England's Almanac" に依れば、一六七四年は印度產キャラコが英國產布帛を壓倒した絶頂期であつたとのことである。同時に Gloucestershire 及び Worcestershire のある織物商が印度織物に反對する最初の請願を議會に提出した。チャイルドに依ればこれは東印度會社に對し不平を有する惡意ある個人か、もしくは英國の會社に對し反感を有する土耳古、又は他の外國の會社から賄賂を受けた者がなしたに過ぎないとなしてゐる。勿論この請願からは直接に何等の結果をも生じなかつたこと前述の如くである。しかしこれを導火としてこゝに多くの議論を生ずるに至り、東印度會社は極力これが辯護に努力した。Thomas Papillon は一六八六年 "A Treatise on East India Trade" を著し、Sir Josiah Child はそれよりも早く、又より周到に、一六八一年に "A Treatise ..... East India Trade the most National." を著し、何れも印度貿易擁護に努力した。今これ等の辯護論並びに反對論を一々檢討する餘裕もなく、又こゝでは問題外である。要するにその後漸次に英國毛織物業の保護は强くなり、他方印度織物は過重なる輸入稅に依つて抑壓されて來た。

元來國王の關稅は從來は國内產業の保護と云ふよりも、王室の收入の源泉として規定されたものであつた。然るに議會の手に關稅權が移ると共に著しく保護主義に傾ひた。一六六〇年以前印度キャラコは單に從價稅五分を一樣に支拂はされたに過ぎなかつた。然るに王政復興(Restoration)の際チャルズ二世に、英國に輸入されるすべてのリンネルにそれ以上の稅を課することを議會は承認した。

その中にはキャラコも印度絹も含んでゐた。東印度會社はキャラコはリンネルにあらずとして故障を申出たが、當局はこれを認めなかつた。そこでその後キャラコは一反について九片から三志の稅を拂はされた。勿論それでも東印度會社はキャラコの原價が安かつたから相當の利益を擧げることは出來た。かつ印度品は前述の如く、一般に好まれてゐたから、この關稅は殆ど保護の役はなさなかつた。

然るに一六八五年さらに議會はすべての東印度から齎されるキャラコ、印度リンネル、絹、その他の織物に從價稅一割の附加稅を承認した。この課稅の目的は一方ジェムス二世のモンマウス侯に對する戰費を撚出するにあつたが、主としては國內織物業の保護にあつたことは疑ひ得ない。この課稅は一六九〇年までの筈であつたが、その時になつても廢止されず、却つてこれを確定し、さらに倍加した。

かくの如く幾度もの課稅に依つて、印度キャラコや絹の使用は幾分か減退はしたが、本來これ等の生產費が安價であるため、容易に稅金を撚出し得、すでに上述したる如く、他の事情に依つて減退はしたが、依然として輸入されてゐたのである。即ち今吾人が問題としてゐる第十七世紀後半に於いては、印度產織物が多額に英國に流入されてゐた時代である。この問題が如何に解決されたか又印度に流出する金銀に對する問題の如きは、さらに後期に於いて論ぜらるべき問題である。

（昭和三年四月二十三日稿）

勞働科學の出發點

——能率問題に對する一批評——

藤林敬三

一

十九世紀は機械學の時代であり、二十世紀は心理學の時代である。前世紀は吾々の物質界に對する知識と其れを吾々の目的に役立たしめ得る吾々の力とに於て異常なる發達を示した。之れに對して今世紀は恐らく人間性に關する吾々の知識と其れを吾々の福祉のために利用する吾々の力とに於て同等の發展を示すであらう。生產上に於ける機械の發明改良が、過去の經濟生活に異常なる變化を齎したと同じく、生產上の人的要素に關する吾々の新しき知識と其の應用とは未來の經濟生活に對して顯著なる變化を齎すに充分であるとは屢〻心理學者の口にする所である。蓋し過去の產業活動に於て世の多く注意を惹きし所は主として生產上の物的手段に關し、其の人的要素に關する考慮は不幸にも顧みらるゝこと少なくして過ぎた。然かも最近時に於ける能率問題の考究は、生產に於て最後に最も重要なるものが機械ではなくして機械を利用する人間にあることを明かにした。然らばかく考へられたる人間の活動を左右するものは何であるか。此處に能率問題は生產上の人的要素に關する心理學的若しくは生理學的研究の必要を認むるに至つた。私は此の新方面の心理學的諸研